

2020年10月18日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 竹内喜保

奏楽 鬼頭容子

前奏

招詞 エフェソの信徒への手紙 第1章17節—18節

讃美歌 讃美歌21—351（聖なる聖なる）

交読 詩編 第86篇1節～10節（p. 94）

祈祷

聖書 マルコによる福音書 第12章38～44節
（新約聖書 p. 88）

讃美歌 讃美歌21—358（子羊をばほめたたえよ！）

説教 「見せかけから自由になる」

今朝わたしたちは、ふたつの分かれた部分をひとつにして聞きます。最初の部分、イエスさまの律法学者に対するととても厳しい言葉、これだけを取り上げるのも、もちろんあります

が、これをその前後の記事とつなげて聞くことも大切だからです。

ひとつの理解は、後半部分のやもめがわずかな銅貨を、神さまに献げたという物語と結びつけること。それは前半部分にも「やもめ」という言葉が出ていることからありますが、この律法学者の心のありようとやもめの心のありよとの対比で捕らえ、理解することが大切だと思うからです。

もう一つは、その前でイエスさまと律法学者との対話、律法学者に対するイエスさまの言葉がすでに記されていることから、それとのつながりで理解することです。神について律法学者の言葉を訂正するイエスさまの言葉が直前に記されていましたが、その一方で、神の国からあなたは遠くないとイエスさまに褒められている面の両方が現れていました。そうすると、この律法学者に対する言葉も、イエスさまに褒められている明るい面と、厳しく戒められている面という暗い面の両方があ

る。やもめの献金ではイエスさまが明るいまなざしで、積極的に評価し、柔らかな心で受け入れて下さる話です。けれどそれと比べてみても、律法学者の見せかけの正しさを厳しく非難しておられるのは暗い面です。そうするとここでは、明るい面と暗い面とが繰り返されていることに気づきます。

そうしますと今日のところでは、こういうふうに理解することが望ましいと思います。イエスさまは、この律法学者に対する批判を、どうしてなさったのでしょうか。ご自分を取り囲んでいる群衆に対して、律法学者たちに気をつけなさいと言われました。よく目を留めて、律法学者の過ちに気づきなさいと言われました。どうして、気づかないといけないのか。律法学者に対する非難を、イエスさまの言葉に自分たちの言葉を合わせて、重ねて「そうだ、そうだ」とやらなければいけないのでしょうか。確かにイエスさまは「**律法学者に気をつけなさい**」と言われました。けれど、律法学者はみんな、律法学者だから悪い存在で、間違いばかり起こしてばかりいると言われた

わけではありません。すでに律法学者の中には、愛のおきてについて正しい理解を持ち、誠実に生きようとしていたために、イエスさまに褒められた人もいました。問題は、ここで長い衣をまとって歩き回る律法学者です。広場で挨拶されることに満足を見出す律法学者です。みせかけの長い祈りをして、やもめを食い物にする律法学者です。問題は律法学者であることよりも、律法学者が犯している過ちです。どうして、それを指摘されたのか。あなたがたがその過ちを犯すなどいっておられるのです。それどころか、やがてイエスさまはご自分の十字架とよみがえりに根ざした教会を建てられます。その教会に生きている者が、このような過ちを越えて、それをひっくり返して、ここに陰の姿があるならば、それをひっくり返したところに出てくる明るい姿に生きることをひたすら願っておられます。ここで語られているのも、わたしたちの罪を表す言葉です。長い衣ももともとは神のおきてを教える者として、当然求められた服装だったはずです。神のおきてを重んじる思いから出たもののはずです。けれどどこかで間違いが起こる。どこかで、おかし

くなる。いったいどこで、おかしくなるのでしょうか。

「やもめの家を食い物にし」とあります。どういうこと
でしょうか。律法学者は、聖書の専門家です。ですから、誰よ
りも聖書をよく知っていたはずです。ですから、やもめがいた
ら、助けようと思っていたはずです。今日よりも、もっと厳し
い社会的にも弱くされていた、女性たちです。子どもを抱えて
いたかもしれない妻たち、母親たちです。ここで、このやもめ
の世話をしなければ、自分は礼拝をする資格もないのだと律法
学者は思い、やもめの家を訪ねたでしょう。助けようとしたで
しょう。「長い祈りをする」とありますけれど、やもめのために
祈ったのだと思います。もしかしたら、わたしたちよりも、本
気で、み言葉に生きようと思ったのかもしれませんが、けれど、
どこかで間違った。何を間違ったのか。「人一倍厳しい裁きを受
けることになる」とイエスさまが言われるほどの過ちが、どこ
にあったのか。

「見せかけの」という言葉があります。もともとこの言葉は、「見せかけ」という意味ではありません。そうではなく、こういうことを考えて下さるといいと思います。たとえば、日曜日の夜テレビで放映されているアニメーションにこういう話がありました。主人公の女の子が風邪をひいて学校を休む。その場合、確かに熱があるからちゃんと親にも先生にも説明をする。親も先生も理由が分かっているから、大事にきなさいねということになる。最初はそのように自分ができなかったことを、正当な理由を上げて説明する。そういう意味の言葉でした。ところが時代を経て少しずつ意味が変わってくる。今のアニメーションのたとえで言えば、最初はたしかにちゃんと理由があった。ところが学校を休んでいると皆が心配してくれる。何よりもいつも怖いおかあさんがやさしいし、自分の好きな食事を作ってくれる。いごごちがよくなる。そうする何とか正当化して病気がまだ治っていないように見せようとする。初めはおかあさんも信用していたけれど、だんだんそれが「見せかけ」の理由であって、本当は怠けたいからごまかしていること

に気づく。テレビの中では、それに気づいたおかあさんからかえってひどく叱られるというパターンで終わりになりますが、ここで使われている言葉も、そんなふうに分を偽る姿を、正当化することを言い表す言葉として、用いるようになった。それはわたしたちにとって他人事ではないように思います。

わたしたちもまた、言い訳をしているところがあります。時には理由にならない言葉をもって、言い訳をすることがあります。それは誰よりも、神さまに対してです。長い衣で歩き回ること、広場で挨拶されることなど、すべてについてです。先ほど申しました、長い衣をまとうということは、律法学者が、神さまに仕える自分の使命、そのための身分を表すのに必要なものだったと思います。ところが、それがやがて、あの人は律法学者、偉い先生なのだと、人に認めてもらうための、勲章のような役割を果たすようになる。やもめの家を食い物にする。多分、やもめのために一所懸命働くと、助けてもらった方でも、僅かな報酬をしたくなつたと思います。それは悪いこ

とではありません。もともとイエスさまご自身も、伝道旅行の間、そのそばに付き従っていた女性たちの世話になっておられたのですから。その中にはやもめもいたかもしれません。その女性たちの世話によって、イエスさまが洗濯してもらったり、食べ物を作ってもらったりして、生活を整えられておられたことは、福音書がはっきり伝えていることです。当然のことです。けれど、そこでも、ちょうど、人のまなざしによって、自分が偉い者であるかのように錯覚し、そのことによって自分の心の生活が、支えられているように思い始めるのと同じように、やもめが献げる物で、自分の貪欲を満たし始める。名誉を求める、面目を保つ心の貪欲と同じように、肉の欲もまた同じように、そこで支えられるようになる。この世で光の中に立つことを、そのように物心両面でも喜ぶようになる。

コロサイの信徒への手紙、第3章の5節に、「貪欲は偶像礼拝にほかならない」言葉があります。これはとても厳しい、けれど、心に堅く留めないといけない言葉です。貪欲がどうし

ていけないのか。まことの神ではないものを神として拝む心になっているからです。その貪欲と闘うために、どうしたらいいのか。いったい、そのような貪欲さに打ち勝つ、まことの礼拝とはどのように作られるのか。ここから先は、それこそ、この次の41節以下のみ言葉に聞くことによって学ぶことだと思います。ただし、ここでも一つ確認しておかなければならないことがあります。それは、やもめが自分の全財産を献げるといふ、とても強い決心をすることができたから、彼女が律法学者に勝る者であったということ、イエスさまがおっしゃっているわけではないということです。そのことだけは確認しておかなければいけないと思います。たとえ全財産を献げても、見せかけの献金になることだって、いくらでも起こり得ることです。まして、わたしたちは、このやもめの献金のお話を既に聞いてしまっただけで、よく知っています。それだけに、わたしたちは、見せかけでも全財産を献げかねないことだってあり得るのです。では、いったい、どこにこの真実を作ることができるのか。

この後、わたしたちは讚美歌 454 番を賛美いたします。
最初に出てくる歌詞は、「愛する神にのみ 依り頼むものは」と
あります。これは「愛する神さまだけが支配するようにしよ
う、神さまだけにいつも望みを置こう」という心を歌います。
それは自分の支配を退ける言葉です。

律法学者がどうして見せかけになってしまったかとい
うと、いつの間にか、自分の宗教行為—愛の行為、祈りの行為—
のすべてが、自分がする行為になったからです。自分が、見ら
れることを好むようになったからです。自分が他人のために祈
ることを好むようになった。自分がその報いを受けることを好
むようになった。愛する神が支配しなくなったのです。愛する
神にすべてを支配していただく、この神さまだけを自分の望み
としよう。十字架と悲しみの中においても、そのように生きる
時、いつも不思議に支えられる。この讚美歌は、そのように歌
います。

この讃美歌の歌詞を改めて読み直した時に、わたしたちのこれまでの歩みもまた、実はそのような言い表しができるのだと思いました。あとひと月ちょっとすると、教会の暦では一年が終わりますが、今年ほど誰にとっても忘れることのできない年であり、お互いにさまざまな体験をしてきた年はないだろうと思います。まさに、十字架と悲しみとしか言いようがないような日々を送った方もあります。けれど、それでもわたしたちは不思議な助けを、不思議な恵みをいただいていたのではないだろうか。もちろん今はまだ十字架を負っていると思っている者にとっても、神が顧みてくださるということを知る時が来るのではないのでしょうか。今わたしたちの礼拝は4月以来二部制を取り、讃美歌も短くして賛美していますから、すべての歌詞をじっくり味わいながら歌うことができませんが、こういう言葉が歌われます。「この悩み苦しき、誰が知るのだろう。この痛み嘆きを 誰がなぐさめよう。むなしく重荷は増えていくばかり」と歌い、次に、「しかし、主の恵みは、私たちに満ち、喜びの日を主は、備えてくださる」と歌います。さらに「苦しみ

の中にも 神は見放さず、ふところに抱いて 良いもので満たす」と賛美します。神さまは、ちゃんと喜びの日を準備してくださる。なぜならいつ恵みを与えたら、わたしたちの役に立つのか、その時をよく知っていてくださるからです。準備をする、備えるとはそういうことです。おそらくわたしたちは生きている限り罪を重ねていく。そのことに気づくとわたしたちは実に困ってしまいます。ではいったいどうしたらいいのかと。けれどこの讚美歌では、「苦しみの中にも 神は見放さず、ふところに抱いて 良いもので満たす」。だから最後の歌詞で、「見捨てることのない 神に依り頼もう」と高らかに歌います。

わたしは、「神は見放さない」「見捨てることのない神」という歌詞を味わいながら、ここでイエスさまから厳しく非難されている律法学者もまた、イエスさまから遠くはないのではないかと思わされました。誰よりも厳しい裁きを受けることになるのだと警告を発しながら、イエスさまは、その裁きの前に

立ちほだかるようにして、ご自身が十字架にかかってくださったからです。わたしたちはいつでも新しく始めることができます。今ここでまさに新しい望みをもって、頭を上げて、歌を歌い始めることができます。わたしたちが思っているよりもずっと早く、ずっと近く、イエスさまは来ていてくださいます。来ようとしていてくださいます。教会はその主を鮮やかに証しするものです。お祈りいたします。

主イエス・キリストの姿だけをはっきりと仰ぐことができますように。わたしたちの心、わたしたちの真実さでは、あなたの前に、言い繕ってしまう見せかけの姿を取り除くことができません。どうか、常に主が共にいてくださり、わたしたちの罪の覆いを、主の手が取り除いてくださることを、わたしたちのかけがえのない真実とすることができるようにしてください。感謝して、主のみ名によってお祈りいたします。アーメン

讚美歌 讚美歌 21-454 (愛する神にのみ)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>